

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一7:32～40「秩序ある生活」

[32-34]「あなたがたが思い煩わないことを私は望んでいます。独身の男は、どうしたら主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。しかし、結婚した男は、どうしたら妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、心が分かれるのです。独身の女や処女は、身もたましいも聖くなるため、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうしたら夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります」

ここでは独身の男女と結婚した男女とが比較されている。この箇所を読むと、パウロは既婚者よりも独身の方がよいと言っているように思える。しかし、ここで重要なのは独身であるか否かにかかわらず、どうしたら主に喜ばれるか、主のことに心を配れるか、という点である。独身でも主に喜ばれない生き方をしている人はいる。結婚も、よりいっそう主に仕えることができるための結婚となってこそ聖書本来の意義あるものとなる。プリスキラとアクラの例→使徒18:24～26,ローマ16:3～4
[35]「ですが、私がこう言っているのは、あなたがた自身の益のためであって、あなたがたを束縛しようとしているのではありません。むしろあなたがたが秩序ある生活を送って、ひたすら主に奉仕できるためなのです」

パウロが今まで語ってきたことは、独身と結婚、どちらが善でどちらが悪かというような問題ではなく、コリント教会の人々が秩序ある生活を送って、ひたすら主に仕えるために益であるかどうかを規準とした勧めなのである。

[36-38]「もし、処女である自分の娘の婚期も過ぎようとしていて、そのままでは、娘に対しての扱い方が正しくないと思い、またやむをえないことがあるならば、その人は、その心のままにきなさい。罪を犯すわけではありません。彼らに結婚させなさい。しかし、もし心のうちに堅く決意しており、ほかに強いられる事情もなく、また自分の思うとおりに行うことのできる人が、処女である自分の娘をそのままにしておくのなら、そのことは立派です。ですから、処女である自分の娘を結婚させる人は良いことをしているのであり、また結婚させない人は、もっと良いことをしているのです」

この箇所は文脈上28節につながる。父親の養育、庇護のもとにある父子家庭の娘の扱いについて述べられている。婚期も迫り、またやむをえない事情があり、そのままでは娘に対する扱いが正しくないと思う場合は娘を嫁がせるのは良いことであり、宗教的な確信のゆえに結婚させないことはもっと良いことであると両方の面からパウロは語っている。ここで言われていることの背景には、当時の古代社会の父親の権威、家族制度というものがあり、今と違って娘の結婚は父親の権限のもとにあったということを考慮に入れておかなければならない。

[39-40]「妻は夫が活着ている間は夫に縛られています。しかし、もし夫が死んだなら、自分の願う人と結婚する自由があります。ただ主にあってのみ、そうなのです。私の意見では、もしそのままにしていられたら、そのほうがもっと幸いです。私も、神の御霊をいただいていると思います」

ここでパウロは未亡人の再婚について述べている。夫の死後、妻は自分の願う人と結婚する自由があると言う。→ I テモテ 5:14 　ただし、「主にあってのみ」と重要な条件が付け加えられている。相手が信仰者であるということはもちろん、6章20節にあるように、自分のからだをもって神の栄光を現すことのできるような再婚でなければならない。ただ主にあってのみ、そのように導かれるのである。しかしさらにパウロはもっと良い道は、そのままにしていることだと言う。これは7章8節でも述べられたが、やもめのままでいるほうが障害も少ないし、ずっと地上の思い煩いからも免れていられるからであろう。そして、彼はこれを命令ではなく意見であるとし、自分も神の御霊をいただいていると思うと付け加える。これはコリント人たちが、自分たちは神の御霊をいただいているのだとあたかも彼らだけが正しいかのように叫んでいたのも、その高慢の熱をさますため、パウロも「私もいただいている」とやり返したのであろう。

コリント人をはじめ、すべての信仰者はどのような状態に置かれていたとしても、秩序ある生活を送り、ひたすら主に仕え、奉仕できるように歩んでいかなければならない。